

# 新たなアスペクトの気づきを促す国語科授業の構築 —小学校第2学年「お手紙」の実践を通して—

教育実践高度化専攻  
授業実践リーダーコース  
M07282I 佐々木 陽子

## 1. はじめに

本研究の目的は、小学校国語科文学的文章の学習における文章の理解の促進・深化を図る学習指導として構想した、新たなアスペクトの気づきを促す視点を組み込んだ授業の効果を実践によって検証することである。

本研究は、作間(2005, 2008)が行った『文学作品の理解におけるアスペクトの転換』の事例から示唆を得て行った。

従来、文学的文章の指導は、児童が作品をよく理解できていないことを前提にして、1つのアスペクト(作品に関する統一的な理解)の形成に目標をおいている。そして、実際の指導場面では、このアスペクトの精緻化を行うために、登場人物の行動や心情を読み取っていく授業が行われる。しかし、1つのアスペクトの形成に目標を置く指導では、文章細部の読み取りの不足を生じる場合がある。なぜなら、アスペクトにそぐわない部分について違和を感じることはない又は見落としがちになるからである。

そこで筆者は、児童が持っている恒常的アスペクト(初読の時点で得た作品に関する統一的な理解)が間違った理解である場合においては、アスペクトの転換を指導目標にすることが望ましく、恒常的アスペクトも一定の支持ができる場合においては、その精緻化を図るとともに、他の新たなアスペクトの気づきを促す働きかけを行うことが必要であると考えた。

以上のことから、本研究では、①新たなアスペクトの気づきを促す視点を組み込んだ授業の構想、②新たなアスペクトの気づきを促す授業の実践、③新たなアスペクトの気づきを促す

授業の効果の検証の3つの課題に取り組み、今後の授業改善に向けた基礎的知見を得ることにした。

## 2. 研究報告書の構成

本報告書は、次の5章で構成した。

第1章 序論

第2章 児童の実態把握

第3章 新たなアスペクトの気づきを促す  
授業モデルの構築

第4章 授業モデルの実践

第5章 結論と今後の課題

## 3. 研究の概要

第1章では、本研究の目的を踏まえ、研究の背景、先行研究の整理、問題の所在から研究課題を抽出した。

第2章では、児童の実態把握を行った。児童の実態把握は、より児童に寄り添った授業構築を行うために欠かせないものであり、授業とは、児童の実態からその内容及び方向性を決めるべきだと考えるからである。筆者は、あらかじめ定めた3領域1事項に関する視点ごとに調査を行い、その実態を数値化して示すことで、第三者の目からでも明確に児童の実態が捉えられるようにした。

### 3.1 新たなアスペクトの気づきを促す視点を組み込んだ授業の構想

第3章では、実践する授業モデルの構想を行った。授業モデルは、児童の実態、教材分析、新たなアスペクトの気づきの3つの視点を踏まえて構想することとした。教材は、アーノル

ド・ローベル著の物語文『お手紙』である。ここで、恒常的アスペクトを「かえるくんとがまくんの友情の物語」（以下、友情の物語と記す）とし、新たなアスペクトを「コミュニケーションツールとしての手紙がえがかれた物語」（以下、「手紙の物語」と記す）とした。新たなアスペクトを「手紙の物語」としたのは、題名が『お手紙』とあるように、本作品は手紙に関する物語だからである。実践では、児童の得ている恒常的アスペクトが「友情の物語」であることを確認した上で、その精緻化を行っていくと共に、「手紙の物語」アスペクトへの気づきを促す指導を行っていくこととした。新たなアスペクトの気づきを促すための手だてとして、①示唆的発問によって新たなアスペクトから得られる意味づけを行う、②新たな枠組みを用いて、文章を捉え直し書き表す活動を取り入れることとした。以上のことを踏まえ、単元目標、評価規準、授業仮説、単元計画、指導計画、授業案、授業で用いるワークシートを作成した。

### 3.2 新たなアスペクトの気づきを促す授業の実践

第4章では、第3章で構想した授業の実践を行った。実際の授業では、「手紙」とはどんなものか知るために、『お手紙』というお話を勉強しようと思いつけて授業を展開した。場面ごとの読み取りの時間では、登場人物の行動や心情の読み取りを行うとともに、「手紙の物語」というアスペクトから意味づけ出来る箇所について、示唆的発問を行い、併せて、授業のまとめとして、勉強した中で「手紙とはどんなものか」気づいたことをワークシートに記入させる学習活動を行った。

実践を行った結果、児童は、『お手紙』を「友情の物語」として読んだり「手紙の物語」として読んだりすることによって、主人公の行動や心情に新たな意味づけを行って読み深めることが出来た。また、手紙の意味を見つけるといった新たな枠組みで文章を捉え直し書き表す活

動を通して、登場人物の心情や行動以外の新たな情報の取り出しを行うことが出来た。

### 3.3 新たなアスペクトの気づきを促す授業の効果の検証

第4章では、実践と併せて、実践した授業が児童の手紙についての理解にどのような影響を及ぼしたかを検証した。

その結果、単元学習前と単元学習後の手紙についての理解には明らかに変化が見られ、単元学習後では、より多く視点から手紙を捉えている児童が増えていた。変化の傾向としては、単元学習前に手紙についての理解が乏しかった児童ほど、変化量は大きいことがわかった。また、授業のまとめとして行った、新たな枠組みで文章を捉えなおす活動の記述と理解の変化との間にも、かなり正の相関が見られた。

実践によって、児童の手紙についての理解が深まったと言える。

### 4. まとめと今後の課題

登場人物の行動や心情の読み取りを行うとともに、示唆的発問や新たな枠組みを用いて文章を捉え直す活動を導入することによって、児童から新たなアスペクトに関する理解の深まりが見られた。このことから、通常の指導である恒常的アスペクトの精緻化に加え、新たなアスペクトへの気づきを促すことが出来たと言える。

今後の実践では、新たなアスペクトの気づきを促すことが出来れば読みの促進・深化が出来ているという前提の確かさを検証すると共に、新たな枠組みを用いて文章を捉え直す活動に関する追試や、他の文学的文章での検証、説明的文章の学習の場合での検討を行う必要がある。

主任指導教員 米田 豊  
指導教員 黒岩 督